

日本雪氷学会北海道支部 30 年を顧みて

雪氷学会北海道支部前支部長 木 下 誠 一

北海道支部は昭和 34 年に発足し、今年で 30 周年を迎えました。当時日本における雪氷学はまだ黎明期とも云える段階で、学会も、積雪寒冷に関する基礎及び応用が現実の問題にどう対処するかを検討し合う同好会的な色彩が強かったように思われます。北海道においてもそのような状況であったわけですが、この 30 年の間に非常な進展が見られ、今日では、基礎から応用まで問題が広範に多様化する一方、内容も、国際的にひけをとらないほどに成長したと云えます。

さる 6 月 13 日、創立 30 周年の記念式が北大学術交流会館で開かれました。30 年間の歩みをたたえて、学会長はじめ、気象学会、農業気象学会の各北海道支部長から祝辞がよせられました。又、雪氷学会の東北、北信越の各支部長からも、懇親会において、スピーチが行なわれ、今後益々の進展が期待された次第です。私は、この記念式において、東晃さん、吉田順五先生、堂垣内尚弘さん、大橋康次さんの諸先輩とともに、支部における活動をたたえる感謝状をいただきました。身に余る光栄と存ずる次第です。さて、私は、発足当時の使い走り役の幹事から、ひき続き幹事長、理事、支部長(昭和 52 年度から 8 年間)と、30 年間ずっと支部の運営に関係して来ました。微力ではありましたが、私なりにつとめさせていただきました。考えてみますと、この 30 年間の北海道支部の進展の歩みは、私自身の歩みとダブって感じられます。そんな関係から、支部 30 年を顧みる記事を依頼される次第になりました。支部 30 年の歩みにつきましては、この号のなかの年表をごらんいただくとよく解ると思いますが、特に私の印象に残ったことを取り出して、ふりかえってみたいと思います。

発足の頃

北海道支部が生れる経緯につきましては、“雪氷”の 1959、Vol.21、NO.3 に初代幹事長の井上力太さんと初代支部長の吉田順五先生が記事をよせられています。雪氷学会は、この支部発足の 4 年前、昭和 30 年に、前身の雪氷協会が発展的解消という形で創立されていました。事務局は東京の気象庁にあり、全国大会も毎年東京で行なわれていました。なんと云っても主力会員が北海道に多い関係から学会の活動をより活発にさせるため北海道支部の設立という機運が芽生えたと思います。昭和 33 年に本部事務局の福井篤さんが、北海道地区の賛助会員獲得のために札幌に来られたときに、支部設立の準備委員会を作る下ごしらえをして行ったのです。支部規約とか支部の活動資金などについて検討を重ねていたわけです。私は当時は、ほんの使い走りでしたので、準備委員会には出席しませんでした。当時は、国鉄と開発局が主になって動いていたように思います。雪氷関係の技術としては、日本では国鉄の除雪が最初と言えます。従って、雪氷学会のなかで国鉄が一番のシニセという自負をもっていました。北海道にも国鉄に除雪や凍上に関連する技術者が多かったようです。そして、札幌の根来幸次郎局長がその先頭に立っていたと思います。一方、開発局は、新興グループとも云うべきもので、戦後の道路整備や新設計画の発展がめざましく、それに附随して除雪や凍上対策にも力を入れて来たためです。土木試験所の伊福部宗夫所長が積極的に推進役をつとめていました。このように、国鉄と開発局がよい意味で張り合っていたように思います。それに、北電、電々、道、市、寒地建築研究所、林業試験場、農業試験場、气象台、北大、民間土木会社等

からも委員が出て準備が進められました。そして、昭和34年5月に、発足の記念式が開かれることになりました。支部長に北大低温科学研究所の吉田順五先生、理事には関係の各官庁や会社から20名ほどが選任された後で、支部長からの委嘱として、幹事長に札幌管区気象台の井上力太さんが、又他に幹事数名がきまりました。事務局は、幹事長の居る気象台におかれ、清水良作さんが会計幹事をうけもたれることになりました。発会式の日には、雪氷学会会長の安芸皎一先生も見えられ、“科学技術の新しい役割について”という格調高い講演がありました。

早速支部事業が企画され、8月22日の見学会(桂沢ダム)、9月30日の研究発表会(北大農学部)、12月6日の除雪談話会(札幌、特別講演として中谷先生のグリーンランドの話があった)が行なわれました。そして、昭和35年の2月5日には、札幌以外での地方における談話会として、紋別市において流氷に関する談話会が行なわれました。この頃全国大会を札幌でという話しがもち上り、昭和35年の全国大会を北海道支部で引受けることになりました。

昭和35年の全国大会

このときは、北大のなかに、クラーク会館が出来たばかりで、この新しい近代設備を使ってみたいという希望がありました。今考えてみますと、それほどよい設備ではないのですが、当時では大変な魅力でした。発表会場として大講堂が使われたのですが、定員800人という広すぎの会場でした。井上幹事長を先頭に幹事一同何回にもわたって準備会を開きました。又、資金面では、国鉄と開発局が主になっていただき、予想外の集金が出来ました。

当時私は、会場係と会計係を担当しました。会場係としては、低温研の当時の若手であった若濱五郎さん、小野延雄さん、藤野和夫さん等を補助として協力してもらいました。新しい会場ということで、なにかにつけ新機軸が多かった割には、なじめないものがあり、大変苦労しました。特に映画については、よい設備ということで安心していましたが、映写機が客席後方の別室の中に入っているため、即応の対応が出来ずに困りました。特に、亡くなった国鉄の荘田幹夫さんが16ミリ映画で、雪斜面をころげ落ちながら雪塊が大きくなって行くのを紹介したとき、雪の中に雪だまが動くという微妙なコントラストを要する映像のため、ピントが合わない画面が流れ、それを注意する連絡が映写機室にとどかず、困り果ててしまいました。荘田さんが壇上で怒り出し、吉田支部長も心配するなど、大変な目に会いました。

発表論文が全体で35という、現在の200余りに比べるとまさに昔日の感があります。勿論1つの会場で、1日半ですますことが出来ました。座長も現在では中堅や若手ですが、当時は長老にお願いしました。支部発足に直接かかわりはありませんでしたが、大御所の中谷宇吉郎先生も心よく座長を引受けて下さいました。

2日目の10月7日の午後には、シンポジウムを開くことになりました。北海道にふさわしい話題ということで、凍上が取上げられました。北大工学部の真井耕象先生の司会で、物理(低温研の大浦浩文)、建築(北大工学部の大野和男)、道路特に北海道における凍上対策(開発局の伊福部宗夫)、鉄道(国鉄の鹿野三郎)、道路(建設省の竹下春見、欠席のため司会の真井先生が紹介)について各先生が約30分づつ講演された後で、午後3時50分から午後5時30分までの1時間40分が討論に使われました。私は、まだ当時凍上を専門にしていなかったのですが、この討論は大変白熱したことを覚えています。支部長の吉田順五先生をはじめ、なくなられた孫野長治先生、黒田正夫さん、それに現学会長の東晃先生からも積極的な発言がありました。討論の内容をそのまま“雪氷”にのせたいということで、録音を記事に書き直すことにしました。始めは簡単に考えていたのですが、実

行してみると、大変な手間がかかりました。大体3分間の討論を記事にするのに1時間はかかったと思います。低温研の鈴木義男さん、若濱五郎さん、小野延雄さん、藤野和夫さんに協力をいただき、昭和36年のVol.23, NO.1に特集としてのせることが出来ました。今読んでみても、当時の白熱した議論が思い出せます。又凍上の機構として現在でも同じ未解決の面があることを強く感じます。

会計係もした関係で、見学会懇親会の会費を徴収する際のおつりの小銭を用意しなければならぬということで、ポケットが小銭でいっぱいになったことを覚えています。私は、生家の小樽から札幌へ汽車通勤をしていたので、朝早くから夜遅くまで、会場の設定その他で大変でした。

ともかく全国大会が終了してほっとしました。全国の会員に、北海道支部のまとまりの良さを見せたと思います。これが、支部の基礎固めに大いに役立ったようです。

以後、北海道支部の活動は、毎年ほぼ予定通りに行なわれています。予算の額に比べ、行事をよくこなしていると思います。これは、歴代の支部長を始めとする理事の方々はもとより、実際に企画運営に当る幹事の皆さんの献身的な努力の賜物だと思います。

以下、30年間の支部活動のなかの若干について、記憶に残ることを述べてみます。

地方談話会について

北海道支部では、総会、講演会、談話会、研究発表会、見学会、講習会の行事があり、年によっては欠けるものもありましたが、毎年ほぼ全部を企画実施しています。特に、談話会については、特定の課題について、数人の話題提供者が最新の内容について発表し、それをもとに討論を行なうというシンポジウム形式がとられています。札幌よりも、他の道内の地で開かれるのが多かったようです。第1回は、前述の昭和36年2月の紋別における海氷の談話会ですが、その後、毎年1回は札幌以外で開かれるのが通例となりました。これは、その地域に特有な話題を取上げ、特に現地の人からも話題を提供してもらって討論を行なうということで、地域に密着した行事であります。そして、その都度地元の人とのふれ合いや、その地域にふさわしい新しい発見があり、私ども札幌から参加した会員にとっても大変勉強になっています。30年間に28回の札幌以外での談話会がありました。旭川8回、釧路5回、紋別3回、北見、帯広、函館が各2回、稚内、倶知安、網走、岩見沢、小樽、士別が各1回です。私は、このほとんどに出席していますが、いつも大変な盛況で、その地の世話役の方々に大変御苦勞をかけたことと思います。

話題はその地特有の、海氷、積雪、寒冷等が取上げられているのですが、最近はそれに副題がつき“冬の生活を考える”(昭54、旭川)、“雪と交通”(昭58、旭川)、“冬への挑戦”(昭59、釧路)、“北国の暮し”(昭60、旭川)、“寒さと暮し”(昭61、北見)、“寒さの利用と楽しみ方”(昭62、帯広)、“小樽の冬と暮し”(昭63、小樽)、“雪に未来をのせて”(平1、士別)というようなキャッチフレーズが談話会を一段と魅力あるものにしています。更に内容も、雪氷学の基礎だけでなく、応用分野を拡げた話題、“雪氷道路のスリップ”“冬のファッション”“流水と漁業”“寒さと呼吸”“冬の健康”“冬と動物”というように、身近な話題が取上げられ、地域の住民と積雪寒冷とのかわりが幅広い分野にまたがり大きな関心がよせられるようになったと思います。

講演会

そのときどきの話題について、第一線の権威者から話を聞くのが趣旨で、基礎から応用まで広い分野について開かれています。又講演をしていただく方も、北海道在住の人の他に、これは旅費の関係もありますが、たまたま関連の学会やその他の用事で札幌に来られた方をお願いすることが多

いようです。特に海外から来られた方が多くなって来ています。これは国際交流が活発になって来た証拠と云えます。昭 42 スイスの de Quervain、昭 45 スイスの Salm、昭 48 アメリカの Weeks、昭 53 カナダの Schaerer、昭 54 中国の施、昭 55 カナダの Roots、イギリスの Goodman、昭 56 中国の黄、昭 59 アメリカの Brown、イギリスの Whitworth、昭 62 スイスの大村、昭 63 ノールウェーの太田、平 1 アメリカの大竹の諸先生と続いています。又雪氷学会 50 周年記念の北海道講演として、昭和 63 年 10 月 29 日にカナダの Gold、アルゼンチンの Corte の両博士の講演がありました。このように講演会では、特に国際化のめざましいものが感じられます。

全国大会

30 年間で全国大会が 5 回北海道で開かれました。第 1 回目は前述の昭和 35 年で、まだ規模も小さかったのですが、始めてのことで苦労もありました。その後、昭 46 の札幌、昭 50 の旭川、昭 55 の札幌、昭 62 の釧路と 4 回あり、規模も次第に大きくなって来ましたが、いずれも盛会のうちに終わることが出来たと思います。特に、旭川、釧路では、地元の学会員の数が多いのにもかかわらず、それまで数回の支部談話会開催の経験を生かし、地元官公署や民間の応援もあって、成功を納めました。全国からの参会者にもよい印象を与えたことと思います。昭和 35 年のときの凍上シンポジウムを皮切りに、研究発表以外に約半日を使って北海道特有の話題が取上げられる習慣となりました。昭和 46 年には融雪、昭和 50 年には冬と生活、昭和 55 年には、折から I C S I の会が低温研で開かれたこともあって、I C S I 委員長のカナダの Roots の話しと北大文学部の岡田宏明先生のエスキモーの話がありました。昭和 62 年には、冬を豊かに一寒冷地における新しい生きかた・暮しかたの創造をめざしてという話題について、熱心な討論が行なわれました。

国際学会

支部 30 年のうちで、最大の行事として、昭和 59 年の国際雪氷学シンポジウム（I G S）の札幌開催があげられます。9 月 2 日から 7 日まで厚生年金会館で開かれました。これは日本雪氷学会との共催ということで、全体の資金集めや総合準備会は東京でもたれたのですが、地元札幌における実行委員会として、当時支部長であった私が委員長となり、低温研の前野紀一さんを幹事長として、支部会員が、2 年ほど前から諸般の準備を進めたわけです。会場、受付、同伴者プログラム、見学、懇親会等各係に別れ、綿密な計画が練られました。受付けのときに参会者に配布する袋のことで東京の委員会ともめるなど、細かい点でいざこざがありましたが、無事終わることが出来ました。外国人が 66 人（同伴者 21 人）、日本人が 123 名（同伴者 8 人）という多数が集まり、又立派な報告論文集も刊行されました。

見学会は、低温研と除雪機械工場で行なわれましたが、低温研に見えられたときには、北大を訪問されたということで、学長の有江幹男先生から歓迎のスピーチをいただきました。

日本における雪氷学の発祥とも云える中谷宇吉郎先生の人工雪の研究が行なわれた札幌の地で、日本で初めての国際雪氷学シンポジウムが開かれたことは大変意義深いものがあったと思います。

事務局

どんな会でも、幹事役は大変です。雪氷学会北海道支部においても、歴代幹事の献身的な活躍なくしては、こうも成功することは無かったと思います。又、事務局につきましても、身銭を切ってもらう形で、資金面でもかなり負担していただいたように思います。

事務局は歴代幹事長の所属する部署におかれました。従って、气象台、低温研、開発局土木研と廻ったわけで、これらの官署には大変お世話になりました。しかし、今後ともこの態勢でなくして

は、北海道支部の運営は成り立っていないので、今後とも御協力をお願いする次第であります。

又、このたびの創立 30 周年の記念事業では、大変すばらしい企画がなされ、心から成功を祈る次第です。特に“雪氷調査法”は長い間雪氷研究者からの要望があったもので、来年の出版が待遠しい次第です。

終りに

支部発足の頃は、除雪、なだれ、凍上、海水、植物の凍害、融雪などの比較的基礎的な雪氷現象をテーマとする事業が多かったと思います。しかし、そのうちに、屋根雪、道路雪などの実際生活面と関連する話題が出て来ました。更に、流水と漁業、冬と動物、冬と健康、冬の手衣服などの、他領域との関連にかかわる話題にもわたるようになって来ました。又、雪氷寒冷の害を考えるだけでなく、積極的に利雪とか自然寒冷利用なども問題とされるようになって来ました。

発足当時の支部の事業を考えてみますと、その進展と広がりを見張るものがあります。今や北国における積雪寒冷のハンディをのりこえ、より豊かな創造性のある地域の開発に向けて進む勢が感じられます。

この意味で、雪氷学会北海道支部の活躍は今後とも大いに期待されるものがあります。